

第49回湯布院映画祭



会 期：2024年8月22日（木）～25日（日）
 会 場：ゆふいんラックホール
 主 催：湯布院映画祭実行委員会
 後 援：由布市／由布市商工会／大分県興行生活衛生同業組合／大分合同新聞社／NHK大分放送局／OBS大分放送／
 TOSテレビ大分／OAB大分朝日放送／エフエム大分／J：COM大分ケーブルテレコム／ゆふいんラヂオ局
 対 象：全国の映画ファン
 公式サイト URL：http://www.oct-net.ne.jp/yufuin-c/

総来場者数（参加数）：2,350人
 内 訳：（国内入場者数（参加数）：23,50人 海外入場者数（参加数）： 人）
 プレス社数：2社
 内 訳（国内プレス社数：2社 海外プレス社数： 社）

■開催内容

当代の人気者、とくに年少のスターや非職業俳優を主演に作られた『アイドル映画』は、映画史の中でとかく軽んじられ、“子供だまし”“お子様ランチ”と揶揄されてきた不遇のジャンルである。たしかに、修練を積んだ俳優の演技やよく練られた物語などの芸術的実力ではなく、世間の人気・知名度に頼りきった『アイドル映画』の企画はその発想自体、安易・安直と呼ばれても仕方がない。映画は芸術であると同時に、興行のための“商品”である宿命から逃れられないとは言え、実際、その作品群中の駄作・凡作には枚挙にいとまが無い。

しかし、そんな中であって稀に目を見張るような佳作・傑作が出現する時もあるわけで、それは、志の高い作家・スタッフ・俳優が、活動屋の意地とプライドをかけて作品に取り組み、主演アイドルが本来秘めていた非凡な才能や映画的魅力を引き出し開花させた奇跡的瞬間に他ならない。

第49回湯布院映画祭ではそんな『アイドル映画』の佳作・傑作・異色作にスポットライトを当て、歴史的検証をしつつ、『アイドル映画』が生んだもの、さらには生んでいくであろう日本映画の未来を展望してみたい。

■2024年度の新規取り組みとその成果・特色など

映画には各年代にその時に絶大な人気を博した俳優が出演していた。戦後で言えば、中村錦之助、美空ひばり、石原裕次郎、加山雄三、吉永小百合などがその代表であろう。所謂スターの映画を見るため、立ち見をしてまでも多くの観客が映画館に押し寄せた。しかし、その当時に、「アイドル映画」という言葉はなかった。初めてその呼称が付けられたのは、山口百恵と三浦友和が共演した一連の映画である。その後、角川映画の大規模な宣伝効果によって、一般の人にも認知されるようになったが、「アイドル映画」という言葉として定義されると理解されやすくなる半面、青春映画や歌謡映画と何が違うのか、出演者や製作者はどれほど「アイドル映画」としての意識を有していたのかを、企画の成立過程まで含めて検証した。

また、映画祭を通して、地方では直に接することが出来ない、「アイドル映画」の出演者や製作者に触れることで、映画の持つ根源的魅力を発見してもらいたい。

